乗円寺 寺報

平成30年1月
新春号　寺報から訊く
寺報No16

明けましておめでとうございます。今年も皆様にとって、良き年となりますよう、心からお祈り申し上げます。

去年の報恩講の時に、発表させていただいたのですが、今年の春頃から、約8か月程かけて乗円寺の玄関・庫裏部分を全面改装いたします。この部分は一部白蟻被害にあっていることもあり、工事が必要となっておりました。これを機に、玄関部分、バリアフリー強化、トイレを男女別にするなどし、さらに利用しやすい寺にするために、改装いたします。工事期間中は使えるスペースが限られるなどご迷惑をかけますが、どうぞよろしくお願いします。

（住職）

平成29年度 報恩講レポート！

去年のこととなりましたが、平成二十九年度の報恩講も多くの方のご協力によって、無事執行することが出来ました。数多くのご協力を頂いたこと、お参りくださったこと、心から感謝いたします。

去年の七月のお盆に、納骨堂改修工事が終了したこともあり、平成二十九年度の報恩講では講演という形で、全国のお墓事情を熟知し、寺・業者・一般の方にアドバイスを送っていらっしゃる㈱寺院デザインの薄井先生をお招きし、「お墓から考える自分の人生」との題でお話をいただきました。お話をお聞きして、お墓やお参りに新しい形が生まれている背景には、いろんなご事情があるのだなと勉強させられましたし、いろんな事例や、参加者の方の意見も聞くことも出来ました。統計から、お墓参りの数は減少していないことも教えてもらい、良き日本の文化の再確認と、あらためてお参りする意味・意義を考える機会となりました。

自分もお墓や今後のお参りについて、質問されることは少なくありません。終活という言葉が生まれたこともあり、自分の葬儀や、今後のお墓のことを考えている方もおられます。その背景には、残った家族に迷惑をかけたくないとの想いであったり、自分自身を整理するというお気持ちがあるように思われます。

しかしながら、いざという時に、残ったご家族の決断を見ますと、生前に故人が決めていたこととは違ったケースになることも多くあります。それは、最後くらいは多くの方にお参りしてほしい、今まで何もしてやれなかったから、せめてお参りはちゃんとしたいなどの、優しいお気持ちから。現在、お参りの機会が少なかったとしても、その時々に、自分なりのお別れの形、今後のお参りの形を考えていらっしゃいます。そのような姿を見ていますと、出来ることなら、お参りされる方も、お参りしていく事になる方も、何がいい悪いという問題ではなく、一度でもいいから互いに話す機会があってほしいなと思います。そして、お墓やお参りの形が変化したとしても、心の拠り所としての場は、これからも大切にしてほしいと願います。寺を預かる身としては、このようなことを考える場や、お参りしやすい環境を増やしていきたいと考えております。少しゆっくりされるお正月、どうか手を合わせる機会を大切になさって下さい。

裏面に、報恩講の講師、薄井先生のお話有！

老僧の独り言

無量壽光
平成三十年戊戌歳元朝

皆様、明けましておめでとうございます。旧年中は寺門運営のために、多大なご尽力を賜り誠に有難く厚く御礼申し上げます。本年も何卒よろしくご協力下さいますよう、謹んでお願い申し上げます。

元旦の早朝各寺院で「修正会（シュショウエ）と称する歳始めの法要が勤まります。京都のご本山（東本願寺）では七日間、金沢別院では三日間の法要が厳修されます。「修正会」＝正月に修する法会という意味です。歳の始めの最初の日、身も心も一新して、一年に備えるという意義を有する大切な節目の法要です。

元旦の早朝、誰しもが実感することでしょうが、眼に見えるものほかすべて、大きく吸い込むひんやりとした空気、初めて捻った蛇口から迸り出る水など、不思議なものでみんな「正月」という一種の「霊気」を肌で感ずるのです。「正月」というものは見えなくても、百人が百人、千人が千人何となく、すべての人の心底から感動を伴って湧き上がってくるもの、これが畏敬の念です（前号に記したこと）。教えられなくても実感し、体感できる貴重な教訓といえましょう。

昔、西行法師と言われる方が初めて、伊勢の皇大神吉に参拝され、広大な神域に一歩足を踏み入れた時に詠まれた有名な歌が残っています。

何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる
（どなたさまがいらっしゃるのかよくはわかりませんが、おそれ多くてありがたくて、ただただ涙があふれ出て止まりません）

私達の身の廻りには眼には見えない、尊いものが無数に存在するものであり、その代表的なものが佛であり神であります。たくさんのご先祖達の願いも、先に亡くなられた多くの肉親の心情も決して眼にすることは出来ませんが、その存在を信ずる心が「畏敬の念」となって心の中からジワッと湧き上がってくるようになり、その素晴らしい心魂の蓄積されたものが、体の外に滲み出る状態を“品”と呼んでいます。

奥能登に伝わる有名な行事（ユネスコ機構にも取り上げられています）「あえのこと」もその一例といえましょう。（稲作を守る“田の神様”を祀り、感謝を捧げる農耕儀礼）眼には見えないけれど、その存在を信じて敬信と畏敬の情を傾ける。しかも紋付、袴の正装で。何と素晴らしいことでしょうか。

また沖縄の与論島では各戸毎に、佛壇上部の長押（なげし：日本建築に見られる部材で、柱を水平方向につなぐもの。）に掲げられた額に「如在」の二文字が書かれています。「在るが如く」・「おわしますが如く」。簡単に訳すると、常に故人はそこにいるが如くに行動すべしということ。いずれにせよ、眼には見えないご先祖からの多くの故人に対する、心の在り方を教えている貴重な言葉だと思います。どこに居ても、教えは常に身の廻りに充満していると教えられるのです。　合掌

発行所：乗円寺　金沢市石引１丁目4-20　印刷協力：川場印刷　TEL076-221-3421　Fax076-221-3449　E-mail:info@jouenji.net
ご要望、ご感想はお気軽にお問合せください。寺報、発送希望がございましたらお気軽に。　乗円寺　ホームページが完成しました！http://jouenji.net

2017年10月4日 報恩講(水)

お墓から考える自分の人生

～現代のお墓事情、
少子化時代のお墓を考える ～

薄井秀夫 先生

2017年 報恩講 特別法話の一部 抜粋版

（前段略）前置きが長くなったんですけども、お墓とお葬式についてアンケートといったらおかしいですけど、皆さんにご意見を聞こうと思っております。

まずどんな死に方をしたいか。嫌な質問するでしょ。でもちょっと考えてみてもらいたい。例えば三択で。ピンピンコロリンポックリ死にたい。老衰で静かに死にたいか。病気で死を意識しながら死にたいか。ちょっと挙手でお願いします。男性の方、よく手を挙げない方いらっしゃるので、できるだけ手を挙げていただきたいですね。では（一番）ピンピンコロリンポックリ死にたいという人。圧倒的大多数ですね。（二番）老衰で静かに死にたい人。四人。（三番）病気で死を意識しながら死にたい。お一人。ちなみに三番を選んだ理由は。

※参加者が答える　それが死らしい。

死らしい。」なかなか深いお言葉ですね。実際私は、当然一番がいいなと思ってたんですよ。最近あることがありまして、三番もいいなって実は思ってるんですね。本当は嫌なんですけど、がんとかになって、痛い思いして死ぬのは嫌なんだけど、三番もいいなということがあったんです。

どういうことかというと、去年の暮れに私実家に帰ったときに、父が私に手紙を渡したんですね。ちょっとお前見とけよということで見て、それは父の古い知人からの手紙だったんですね。私の父は車の会社に勤めてるんですけど、転職を二回してるんですね。つまり三つの職場に勤めてた。若いときに勤めてた会社っていうのは、多分二十代のときなんですよ。つぶれちゃって倒産したんですけれども、倒産するときにその会社の先輩が一緒に、次の会社に連れて行ってくれたんですね。倒産した会社っていうのはメグロオートバイっていう、オートバイの会社なんですけど、そこから父の先輩が、じゃあ俺が行くところがあるから一緒に来いやということで、浜松のスズキ自動車に連れて行ってくれたんです。その先輩が二十代から三十代ぐらいまで、うちの両親と深い付き合いがあったそうですけれども、その方からの手紙だったんですね。私はその方の記憶があまりはないんですけど、子供の時よく遊んでもらったらしいんですけど、その後父はまた転職をしまして、群馬のほうに越してしまったので、その後は五年に一度とか、十年に一度会うぐらいだったそうです。

父はもう八十四ですから、その先輩という方は九十近い方だと思うんですけど、その方からの手紙は…本人からの手紙と、奥さんからの手紙が添えられてるんです。それはもうお亡くなりになった方からの手紙なんですね。本人はお亡くなりになる前に、父に手紙を書いてたんです。それはがんだったんですけど、がんになってホスピスに入られていた。「ホスピス」分かると思うんですけど、回復の見込みがない方が入る施設ですね。恐らく何カ月か分からないですけど、三カ月とか半年という余命を告げられて、それでホスピスに入られたと思うんですが、そこで父に手紙を書いて今までの思い出話とか、感謝の言葉が添えられて。その方の奥さんが、手紙を添えて何月何日に亡くなりましたと。こういうことで葬儀をあげなかったけれども、ご連絡差し上げますっていう手紙だったんですね。

私も会ったことがあるらしいんだけども記憶にない方なんですが、読んだ瞬間涙がボロボロ出てきたんですね。本当にそれを書いてるときはどんな気持ちだったんだろう。しかも父に対する感謝とか、父に言わせれば、本当にお世話になった人で、仕事もその人にお世話になってるぐらいですから、こっちがお世話になってるぐらいの人なんですけど、そういった方が父に感謝をたくさん述べられて、死を意識する中で書いた手紙なんですね。

そういうときに多分手紙からは分からないほど、つらい思いをされて手紙を書いて、もしかしたら、その時点で結構苦しい状態だったのかもしれない。それは分からないですけど、そういう手紙が来て、それを見たときに初めは感動しましたし、大変な思いで父に手紙を書いたことに対する感謝もあったんです。ふと冷静になって何カ月か経って考えると、こういう死に方って素晴らしいなってそのとき思ったんです。

（途中略）

今後は何が主流になるかということではなくて、いろんな選択肢がある時代。一般のお墓もあれば、納骨堂もあれば、永代供養墓もあれば、散骨もあれば、樹木葬もあれば、納骨堂でもさっきお見せしたような機械式の納骨堂もあれば、それぞれがそれぞれの環境に合わせて、生活に合わせて選んでいく。それが今後の時代なんじゃないでしょうか。

それは多分お墓だけではなくて家もそうですよね。マンションを選ぶ人もいれば一戸建てを選ぶ人もいる。車もそうです。高級車を選ぶ人もいれば軽自動車を選ぶ人もいる。最近の若い人は車そのものに興味がないという。それも時代の中でそうなっていくわけです。私が若いころは車を買うのがステータスみたいなもので、親に車を買ってもらう約束で、地元の大学に行くなんていう友達もいました。それだけ車って大切だったんですけど、恐らく今そんな発想する若い人はいない。それは多様化の時代の中で、我々がいろいろ選んでいかなきゃいけないということだと思うんです。お墓も恐らくバリエーションはまだまだ増えると思います。

ただ増えても大切なことは、残された人が亡くなった人に対して、本当に心を込めて手を合わせる場であること。それさえ確保されてれば、それ以上でもそれ以下でもないと思うんですよ、お墓っていうのは。私はさっき機械式のお墓は好きじゃないって言いましたけど、あのお墓だってそこに行って、おばあちゃん、おじいちゃんが一生懸命手を合わせてる姿を見ると、そうか、これでもいいのかって思わされるんですよ。いろんな問題があります。機械式だとつか壊れるので、そういった心配もあります。機械ってパソコンでも車でも必ず故障しますよね。そういう心配があるので、そういうときどうするのかなとか思ったりするんですけれども、それでもそこに遺骨があって、そこに故人がいるっていうふうに思えれば、われわれはそこで癒されますし、どんな形であってもあの世にいる大切な家族に思いは絶対届くはずなんですね。だからそういう場であればこそ、お墓というのは形にこだわらなくてもいいんじゃないかなと私は思ってます。**（その後、続く……。）**

法話の全文版を希望する方は、月参りの際かFAX・電話・メールで（表面）ご連絡ください。1冊差し上げます。